

## 時間の中心 Uncas

——クーパーの描いたメシヤ像——

肴 倉 宏

Hiroshi Sakanakura:Uncas in the center of Time:

Cooper's image of the Messiah

クーパーの批評家たちは、これまで、クーパーを広大なアメリカの空間を描いた作家とみなしてきた。クーパーの描いた空間を取り上げる立場にも大別して、二つの流れがある。その一つは、Henry Nash Smith によって示された無人の空間 the West との関連でクーパーの作品を解釈する立場だ。<sup>1</sup> もう一つは、Howard Mumford Jones によって提出された視点だ。彼は、クーパーの描く空間を当時の風景画家たちの自然描写と関連づけて研究する方向をうち出した。<sup>2</sup> これらの視点は、クーパーの作品の豊かさを評価するのに役立った。

しかし、批評家たちは空間を重視するあまり、クーパーの作品に描かれた人間像の豊かさを単純化し過ぎたり、あるいは、矮小化し過ぎたという誇りを免れ得まい。彼等は、作品に描かれた人間像に与えられている豊かさを平板なものにしてきたのだ。クーパーの人間像のもつ豊かな意味合いを取り戻すには、空間の視点から解放する必要があるだろう。

*The Last of the Mohicans*(1826)は、出版の順序からいくと、Leatherstocking Tales の第二作目である。この作品は、タイトルが示すようにモヒカン族の若きインディアンUncas の生と死を描いた物語である。クーパーの批評家たちは、この作品を Westward movement の一コマを活写した作品としてとらえてきた。つまり、彼等は、空間を重視してきたのだ。そこから、彼等は、Uncas の生と死の物語を開拓の過程で白人によって征服されてゆくインディアンの運命を描いた物語として解釈してきた。

この論文では、空間の枠組から人間像を解放し、人間像のもつ豊かな意味を再考しようと試みる。この論文では、*The Last of the Mohicans* に描かれたUncas が、象徴的な意味を与えられている人間であることを示す。そのため、作品の第1章から第3章はじめまでの作品の構成に中心を据えて論じることに

する。

クーパーは、*The Last of the Mohicans* の最初の3章で Uncas の生と死のドラマが演じられるに必要な準備をしている。まず大切なのは、ドラマが演じられる舞台の設定である。この舞台を構成する重要な要素が、自然なのだ。クーパーは、第1章の書き出しで、自然との戦いが敵対する者同志の戦いに先立つと述べている。続いて、クーパーは、森林地帯に英・仏両軍の大部隊がいることを述べる。多数の人間がいることを述べたうえで、クーパーは、“the forest . . . appeared to swallow up the living mass which had slowly entered its bosom.” (15)と云う。<sup>3</sup> こうしてクーパーは、自然の広大さを強調するのだ。この点は、作品の中で繰り返し描写されていることだ。

クーパーは、漠とした自然を読者に示してくれた。彼は、自然の物理的な広さを強調するだけでない。クーパーは、空間が超自然的意味も与えられていることを示そうとするのだ。Howard Mumford Jones は、クーパーのパノラマ的な自然描写が Hudson River School に属すると言われる画家たちの自然描写と共通していることを指摘したうえで、両者が描こうとしたことは、“the grandeur of God working in the universe” であると述べている。<sup>4</sup> クーパーは、神が自然を通して自らを啓示するということを示そうとしたのだ。従って、クーパーの描く自然は、見る者の心の中に“the awe or humility”をもたらしものなのだ。<sup>5</sup> 自然は、信仰の対象とされるような宗教的な意味が与えられていると言える。

しかし、自然は、舞台を構成するもう一つの重要な要素である死と闇でおおわれている。クーパーは、宗教的な意味を与えられた自然を描いたすぐ後で、それと対照的な面をやはり第1章で描いている。自然は、英・仏両軍が死闘を繰りひろげている“the bloody arena” (12)でもあるのだ。そのうえ、死体が累々と続く森林地帯は、闇に包まれているのである。クーパーは、森林地帯を“an impervious boundary of forests” (11)とか“the interminable forests” (13)と描き、森の中は、光を通さず昼なお薄暗いと言う。加えて、クーパーは、物語を夕方から始め夜へと進めていることが多い。残照がすぐさま夜の闇にかき消されてしまうことで、森の中は、より一層暗さを増す。この点について、Philbrick は、“almost always Cooper’s protagonistts are hemmed in by darkness, mist, or the cover.”と述べている。<sup>6</sup> 自然は、まるで墓場のよう

なぶきみな様相を呈している。

クーパーは、死臭を漂わす闇を一人のインディアンと結びつけて描く。このインディアンは、後で Magua という名前であることが読者に知らされるのだが、物語が始まるとすぐに舞台上に登場する。彼は、前日の夕暮にエドワード砦に “the unwelcome tidings” (17) を持って来た。夕方に現われたこのインディアンは、これからすぐに訪れる不吉な闇の前触れのようなのだ。さらに、クーパーは、この男と闇の結びつきを強調する。この男の表情は、闇のように暗い。そればかりか、Magua の暗さは、ただならぬ嫌悪感すら与えている。クーパーは、このインディアンの表情を次のように描いている。

The colours of the war-paint had blended in dark confusion about his [Magua's] fierce countenance, and rendered his swarthy lineaments still more savage and repulsive, than if art had attempted an effect.

(18)

クーパーは、Magua の暗さがインディアンが通常顔にぬる絵具だけの効果によるものでないと言う。こうして、クーパーは、Magua の表情に浮かぶ暗さが、この男の本質に根ざしていることを暗示しているのだ。

クーパーは、物語の進行につれて Magua の本質を読者に明らかにする。それによって、クーパーは、舞台を包む闇の性質を明らかにしようとするのである。クーパーは、Magua を倫理的に墮落したインディアンとして描いている。Magua は、白人と接触し、“the fire-water” (102) を飲むことを覚え、その結果、“a rascal” (102) になりさがったのだ。彼の墮落の原因は、文明と接触し宗教的意味を与えられている自然との関係を失ったためなのである。次に彼が読者の前に姿を現す時、Magua は、大虐殺を引き起こした首謀者として現われる。クーパーは、第17章で The Massacre of William Henry の場面を描いた。それは、イギリス軍の将兵や婦人・子供が殺された史上有名な事件である。クーパーは、この事件とヒューロン族を結びつけて描き、ヒューロン族が大量殺りくを行ったのだと言う。そして、そのヒューロン族の背後にいて彼等を操った者こそ、Magua であるとクーパーは描く。Magua は、血に飢えた者であり、森林地帯にころがる死体は、彼の暗躍のせいなのである。最後に、クーパーは、死をもたらず Magua を “the dusky savage the Prince of Darkness, brooding on his own fancied wrongs, and plotting evil.” (284) と描く。Magua は、悪の化身なのだ。従って、舞台をつつむ闇は、倫理的腐敗を掩蔽

し、悪の跳梁を許す象徴的な意味を帯びた闇なのである。

クーパーは、まず始めに Uncas のドラマが演じられるに必要な舞台を設定した。宗教的な意味が与えられていた自然は、背後におしやられ、その表面を倫理的腐敗を隠す闇がおおっていた。Magua が君臨する舞台は、Beard が言うように “his[man’s]fallen state” なのである。<sup>7</sup> こうして、これから、闇におおわれた舞台で演じられるドラマの中心が、死をもたらす本質である悪との戦いであることが暗示されているのである。

次に、クーパーは、舞台に人物を登場させる。登場したのは、読者が期待する主演 Uncas ではない。彼の登場に先立って、David が第1章後半から舞台に立つのだ。David は、これから登場する Uncas を予表するという重要な役割を与えられている。このような人物を批評家たちは、滑稽な人物であると簡単に片づけてしまう。彼等は、David に与えられている役割の重要性を見落しているのだ。<sup>8</sup>

クーパーは、David と聖書のダビデの類似点を通して、David の Uncas を予表する役割を示す。名前が両者に共通しているだけでなく、David は、聖書のダビデ同様、音楽の才能にもめぐまれているのだ。たとえば、クーパーは、David の声を “the softness and sweetness of its tones” (17) と描写し、それが音楽的であることを示している。そのうえ、David 自身、 “the psalms of David” (25) が一番すぐれているので、 “I utter nothing but the thoughts and the wishes of the King of Israel himself.” (25) と言うのだ。David は、常に聖書のダビデのように振る舞う。このように、David が、聖書のダビデとの類似性を強調すればするほど、その結果、David の後に登場する Uncas が、聖書のダビデに予表され、彼の後に出現することが予定されている人物イエス・キリストに類似してくる。それだけでなく、Uncas が音楽の才能にめぐまれている David よりも美しさをもそなえた人物であることが暗示されてくるのである。

クーパーは、David と聖書のダビデとの類似点もさることながら、相違点も描いている。McAleer は、類似点を論じているが、相違点に関しては、全く述べていない。<sup>9</sup> David に与えられた役割を考えると相違点のほうが、類似点よりも、より重要なのである。というのは、それによって、David に予表される Uncas の姿が、より明確にされるからである。

まず第一に、クーパーは、David と聖書のダビデの相違を肉体的特徴におい

で示す。聖書のダビデは、「姿も立派であった」と記されている。<sup>10</sup> 彼と比べると、David は、釣り合いがとれず、ぶかっこうなのだ。クーパーは、David を次のように描いている。

The person of this individual was to the last degree ungainly, without being in any particular manner deformed. He had all the bones and joints of other men, without any of their proportions. (16)

David は、聖書のダビデと比べて、不完全なのだ。

次に、クーパーは、音楽的面において相違点を示す。David は、Magua が悪魔的人間であることは、どうやら気づいている。しかし、彼の歌う賛美歌は、Magua から悪霊を追い出すことはできなかった。そのことを告白して、David は、“I have tried him [Magua], sleeping and waking, but neither sounds nor language seem to touch his soul.” (223)と言っている。聖書のダビデがサウル王にとりついた悪霊を豎琴を奏でて追い払ったのに比べて、David は、明らかに対照されているのだ。<sup>11</sup> 悪霊を追い払えないだけでなく、David は、皮肉にも悪の化身である Magua を呼び込むはめになるのだ。ウィリアム・ヘンリー岩の陥落後、インディアンたちは、暴虐の限りを尽くす。David は、彼等を鎮めようとして賛美歌を歌う。しかし、そのことが、逆に David の居場所を Magua に知らせてしまうことになるのである。David は、悪に対する霊的能力を欠いた人物なのである。こうして、David は、彼の後に登場する主役 Uncas が彼より完全で、そのうえ、霊的能力においてもすぐれていることを予表するのである。その結果、David の後に登場する Uncas とイエス・キリストとの類似性が強められてくる。

前座を勤めた David に続いて、主役 Uncas が、ただちに舞台に登場する訳でない。クーパーは、Uncas の登場をもう少し引き延ばすのだ。そうすることでクーパーが狙う効果は、Uncas の登場に寄せる読者の期待を高めることだ。こうして、Uncas は、読者にとって、出現が待ち望まれる人物になるのだ。Uncas の出現を待ち望む点では、作品に描かれた登場人物たちも同じである。クーパーは、第3章の書き出しの部分で二人の人物が Uncas の出現を待っている様子を次のように描いている。

two men were lingering on the banks of a small but rapid stream. . . like those who awaited the appearance of an absent person, or the approach of some expected event. The vast canopy of woods spread

itself to the margin of the river, overhanging the water, and shadowing its dark current with a deeper hue. (28)

二人の人物は、木陰で Uncas の出現を待っているのだ。

この二人の人物は、極めて重要な役割を与えられているのだ。彼等は、Uncas をとらえる視点を読者に提供するだけでなく、Uncas に対するそれぞれの関係をも示してくれるのである。二人の内の一人は、作品では、Natty と短縮形で呼ばれているが、正式には、Nathaniel Bumppo と言われる人物である。クーパーは、木の下で Uncas の出現を待っていた Natty の表情を “without guile” (30) だけでなく、“charged with an expression of sturdy honesty” (30) と描いている。Natty は、ヨハネ福音書第 1 章に描かれたナタナエルを髣髴する。Natty は、イエスに「いちじくの木の下にいるのを見た」と言われ、「この人には偽りが無い」と言われたナタナエルを想起させてくれる。<sup>12</sup> 従って、Pearce や Walker たちのように、Natty に “a Christ-figure” や “its[America's]first distinct messiah image” を見るべきではない。<sup>13</sup> むしろ、Natty は、メシヤであるイエス・キリストを待ち望む人物として解釈されるべきである。こうして、クーパーは、これから登場する Uncas が、イエス・キリストのような人物であることを読者に印象づけようとする。

重要な役割を果たすもう一人の人物は、Chingachgook である。彼は、Uncas の父親なのだ。クーパーは、Chingachgook と Uncas を厳格さと愛情によって支えられている親子として描いている。Chingachgook は、命令に絶対的な服従を要求する厳格な父であり、Uncas は、Natty の忠告を無視するが、父に忠実に従う息子である。クーパーは、この親子を次のように描写している。

The young Mohican cast a glance at his father, but maintaining his quiet and reserved mien, he continued silent. Chingachgook had caught the look, and motioning with his hand, he bade him speak.

The moment this permission was accord, the countenance of Uncas changed from its grave composure to a gleam of intelligence and joy.

(213)

厳格な父に従うことは、Uncas にとって喜びでさえあるのだ。このような息子を Chingachgook は、温かく見守る。クーパーは、Chingachgook の視線を次のように書いている。

The eyes of the father followed the plastic and ingenious movements of the son with open clelight, and he never failed to smile in reply to the other's contagious, but low laughter. (200)

Uncas は、Chingachgook の愛する息子である。しかも、たった一人の息子なのである。

クーパーは、親子関係を示したうえで、Chingachgook の口を通して Uncas をとらえる視点を読者に示す。第3章で、Chingachgook は、Uncas の出現を待ちながら、モヒカン族の歴史を Natty に話す。Uncas の登場は、モヒカン族の歴史と深く結びついている。Chingachgook は、モヒカン族を “the grandfather of nations” (33) と各部族の中で最古の歴史を持つという。そのモヒカン族の中で、Chingachgook は、由緒ある家柄の出なのだ。彼は、その血筋を誇らしげに “The blood of chiefs is in my veins, where it must stay for ever.” (33) と言う。続いて、彼は、Uncas が名家の最後の者になると予告して言う。

Where are the blossoms of those summers! —fallen, one by one: so all of my family departed, each in his turn, to the land of spirits. I am on the hill-top, and must go down into the valley; and when Uncas follows in my footsteps, there will no longer be any of the blood of the Sagamores, for my boy is the last of the Mohicans. (33)

名門の家柄は、Uncas で絶え果てると言うのだ。彼が舞台に登場する前に Uncas の死すべき運命が予告されているのである。Uncas は、父の予告に従い、しかも、その死の予告が実現されるために登場することになるのである。こうして、クーパーは、Uncas がメシヤ的使命を帯びて登場する人物であることを示そうとする。

クーパーは、第3章のはじめまでで、Uncas の登場に必要な準備を終えた。まず第1に、クーパーは、舞台を設定した。舞台は、宗教的意味が与えられた自然と倫理的腐敗を隠す闇から構成されていた。その舞台に次々と人物たちが登場し、Uncas がどのような人物かを暗示してきた。Uncas 自身の登場が待たれるのだ。

いよいよ、Uncas が倫理的腐敗を覆い隠す闇の支配する舞台に登場する。彼は、父 Chingachgook が死の予告をした直後に、しかも、父の言葉を聞きつけ、それに応ずるように “Uncas is here!” (33) と言って登場するのだ。そし

て、Uncas は、父の命令を待ってから自分の登場した目的を語る。彼は、the Maquas と呼ばれているヒューロン族を追い求めていたのだ。彼は、それを “I have been on their trail [the Maquas] . . . but they lie hid like cowards.” (34) と言う。Uncas は、闇の中に悪の隠れ場所を探り、それに決定的な一撃を加えるために登場したのである。Donald Darnell は、このような Uncas を “the Messiah” と指摘している。<sup>14</sup> しかし、より重要なことは、クーパーがメシヤ像をどのように描いているのか、また、なぜ描いたのかである。この点に関しては、Donald Darnell は、Uncas をメシヤであると指摘しているだけで全く論じていない。

クーパーは、Uncas の姿を物語の進行につれて読者に示してゆく。Uncas の諸特徴は、Magua の特徴が悪の化身であることを示したように、メシヤ的使命を果たすに必要な象徴的な意味が常に与えられている。Uncas は、Natty を除けば、これまで白人と接触したことがない自然人なのだ。この点、Uncas は、Magua と全く対照されている。クーパーは、物語の前半部すなわち Uncas の登場から第17章 The Massacre of William Henry までで、メシヤ像としての Uncas を宗教的な意味が与えられた自然との関係を強調して示してゆく。

まず第一に、クーパーは、Uncas の体つきを通して自然との関係を示す。クーパーは、Uncas を “the upright, flexible figure of the young Mohican, graceful and unrestrained in the attitudes and movements of nature.” (52) そして、続けて “there was no concealment . . . to the dignified elevation of his receding forehead, together with all the finest proportions of a noble head.” (52-53) と描く。Uncas は、美しく均整のとれた体つきをしているのだ。この点をクーパーは Heyward の受けた印象を通して、さらに強調する。Heyward は、“uncorrupted natives” (53) によくいる “the perfection of form” (53) を見慣れていたが、Uncas を見て “an unblemished specimen of the noblest proportions of man.” (53) と深く感銘を受ける。Uncas は、一点のきずもない完全さを表わしている。この点、彼は、前座を勤めたぶかっこうな David と明らかに対照されているのだ。こうして、Uncas は、象徴的意味を与えられた自然の完全さを体現した人物ということになる。

次にクーパーは、Uncas の声の特徴を描写する。クーパーは、Uncas の声に言及する時、常に音楽と結びつける。たとえば、“soft” (33), “the music of



their language” (200), “the softest notes of his own musical voice” (308) という具合である。このような言葉で描かれている Uncas は、自然の背後にいる超自然的な存在の美しさを身をもって示すのである。

なによりも、Uncas の特色は、彼の行動力である。クーパーは、Uncas の動作を描く場合、常に躍動感を喚起する言葉を用いている。たとえば、“springing to his feet with eagerness” (34), “a light and vigorous form. . . leaped, with incredible activity and daring, into the very centre of the Hurons.” (111),あるいは、“Uncas. . . bounded away from the spot.” (184), “The young Mohican darted away.” (185) という具合である。クーパーは、Uncas を溢れんばかりのダイナミックなエネルギーを内に秘めたインディアンとして描いている。

クーパーは、このような Uncas を鹿のイメージで描いている。フランス語に達者な Heyward は、英語に翻訳して、Uncas を “the ‘nimble deer’” (91), あるいは、“Bounding elk” (91) と表現する。鹿のイメージを強調するため、クーパーは、さらに、Uncas の動作を “with the activity and swiftness of a deer” (237) と言っている。しなやかに、かつ自由奔放に荒野を跳躍する鹿のイメージは、行動的な Uncas を表現する適切なイメージであると言えよう。Uncas は鹿のように生命力に満ちているのだ。こうして、クーパーは、Uncas が象徴的な意味を与えられた自然に漲る躍動的な生命力を具現した人物であることを読者に示すのである。

Uncas の登場の目的は、死に支配された舞台に躍動的な生命力を吹き込むことでもあるのだ。舞台の表面を死臭漂わず闇がおおっていた。その闇は、自然との接点を失った悪の化身 Magua によってもたらされた。このような舞台への Uncas の登場は、死をもたらした根源を闇の中に探り、それに一撃を加えることであった。そればかりか、Uncas の登場は、死の世界を生の世界へと転換する契機になるのだ。それ故に、闇の中でうごめき、そこを安住の地としていたヒューロン族は、Uncas の登場を恐れるのだ。彼等は、Uncas の本質を認めて常に “‘Le Cerf Agile’” (91) と言って恐れるのである。こうして、クーパーは、物語の前半部で Uncas のメシヤ性を自然との関連で描いてきた。

クーパーは、物語を後半部に展開してゆく直前にウィリアム・ヘンリ砦の陥落と大屠殺の場面を描いている。このことは、小説の構成を考えるうえで重要であるばかりか、Uncas のメシヤ性を考える時にも見落とすことができない重

要なものである。砦の陥落は、英・仏両軍の戦いを背景にしていた物語の前半部のクライマックスである。同時に、それは、後半部の序章でもある。後半部のクライマックスは、Uncas の死である。従って、砦の陥落は、物語の前半部で David が Uncas の登場を予表したように、Uncas の死を予表する事件なのである。

クーパーは、物語の前半部で、Uncas の登場が闇の中に躍動する生命力をもたらすことであると書いた。それと対照的に、クーパーは、物語の後半部で Uncas のメシヤ性を彼の死の中に探るのだ。Uncas の死の予告は、第 3 章で Uncas の父 Chingachgook によって、すでに予告されていた。従って、Uncas のメシヤ性は、彼の父によってされた死の預言を読み取る能力をもつか、また父の預言に従う意志があるかによって判断されてくるのである。

Uncas の能力は、未知の荒野で発揮される。Natty は、これから Uncas と共に入って行く物語の後半の世界が全く人間の知識の通用しない世界であることを Heyward に警告して次のように話す。

We are not about to start on a squirrel hunt, or to drive a deer into the Horican, but to outlie for days and nights, and to stretch across a wilderness where the feet of men seldom go, and where no bookish knowledge would carry you through, harmless. (189)

これから入って行く世界は、知性や理性で把握することができないのだ。このような世界でこそ、Uncas は、能力を示すのである。Uncas は、超能力を与えられているのだ。Natty は、Uncas の力量を知っているので、耳慣れぬ音を聞いた時、“We must give a call to Uncas. The boy has Indian senses, and may hear what is hid from us.” (192) と Heyward に語りかける。Uncas は、一般の人間に隠されている事柄を予知する能力を持っているのだ。それ故に、彼は、父 Chingachgook の死の預言を読み取ることができるのである。

そのうえ、Uncas は、次々と他の人物に隠されている印を見つけて彼の死が予定されている物語のクライマックスへと進んで行く。Uncas は、やみくもに死に向かって突き進むのではない。彼の行為は、自暴自棄からでもなければ、若さ故の無鉄砲さからでもない。Uncas は、父の命令に従う忠実な息子であることは、すでに述べた。従って、Uncas は、予知能力と強い意志を備えて父の預言に従うメシヤ的使命を着実に果たそうとしているのである。

クーパーは、物語の後半で次々と Uncas にとって重要な場面を描く。彼は、

死に向かって歩む Uncas にまつわるこれらの場面を聖書に描かれたイエス・キリストの逮捕から死に到る場面と重ね合わせて描いている。まず、クーパーは、Uncas の逮捕の場面を第23章で描いている。Uncas が敵対するヒューロン族に捕えられた理由は、“a flying coward” (241)のせいなのだ。この臆病者は、数ページ後で仲間のヒューロン族に殺される。その理由は、仲間が呼んでも、それに答えなかったからだという。つまり、彼の死は、臆病の報いなのだ。Uncas と臆病者について読んだ読者は、イエス・キリストとイスカリオテのユダのことを連想する。クーパーは、逮捕された理由に加えて、逮捕された時が夜だったことも描いている。彼は、かがり火をかざしてヒューロン族が集まっている様子を次のように描いている。

A dozen blazing piles now shed their lurid brightness on the place, which resembled some unhallowed and supernatural arena, in which malicious demons had assembled to act their bloody and lawless rites.

(237)

クーパーは、ヒューロン族が居る所を悪の巣窟だと言うのだ。そのような所で Uncas は、“prepared to meet his fate like a hero” (237)と描写されている。そのうえ、“his eyes. . . dwelt steadily on the distance, as though it penetrated the obstacles. . . and look into futurity.” (242)と描かれている。Uncas は、死の運命を永遠の世界に思いを馳せて受け入れようとしている。こうして、クーパーは、Uncas の逮捕の場面を読んだ読者にイエス・キリストの逮捕の場面を連想させ、Uncas をイエス・キリストと結びつけさせようとするのである。

次に、クーパーは、第30章で裁判の場面を描く。ここでも、クーパーは、聖書の場面を読者に連想させる。第30章で、ディラウェア族の最も尊敬されている酋長 Tamenund が裁判官の役をしている。彼の前に立たされた Uncas を“the erect, agile and faultless person” (307)とクーパーは描き、すぐその後で、Uncas が“the air of a king” (309)を帯びていると述べている。汚れなき Uncas が裁判にかけられるのだ。従って裁判にかけられる理由は、全く Uncas の犯罪性によるものでないことが示されているのである。Tamenund は、Uncas の弁明を期待するのだが、Uncas は沈黙し、そのうえ、彼は、悪の化身である Magua の主張を容認する。読者は、罪なき Uncas が裁判にかけられるこの場面を聖書に描かれたピラトによるイエスの裁判の場面と結びつけて

読む。

クーパーは、物語のクライマックスとして Magua と Uncas の戦い及び Uncas の死をそれぞれ第31章と第32章で描いている。Uncas は、悪の化身である Magua との戦に赴く前に祈りを捧げる。Uncas は、“his own dependence on the Great Spirit” (319)と神への全幅の信頼を表明するのだ。従って引き続き起こる Uncas の死は、神の意志にそうものであり、父 Chingachgook の預言を成就することにもなるのだ。第32章のほぼ終りで、Uncas は、Magua に背中をぐさりと刺されて死ぬ。クーパーは、Uncas の死の場面にイエス・キリストの十字架を連想させるものを全く描いていない。それどころか、彼は、あっさりと Uncas の死を処理している。

その理由は、なぜであろうか。これまで、クーパーは、作品と聖書の類似性を極めて重視して描いてきた。しかし、ここ最後に到って、作品と聖書の類似性を強調しないとは、奇妙なことだ。しかも、クーパーは、これまで Uncas のメシヤ性を聖書のイエス・キリストと結びつけて描いてきた。そのことを考えると、メシヤ性を表わす極みであるイエス・キリストの十字架と Uncas の死を結びつけて描かないのは、全く腑に落ちない。十字架を描かなかったのには、理由があるのだろうか。

それに答えるうえで、Donald Ringe の示唆に富む指摘が役に立つ。彼は、クーパーの時代の連想心理学の重要性を次のように述べている。

Actually, his[Cooper's]choice of material was probably the result of . . . the associationist psychology that underlay the aesthetic opinion of the times. To Cooper's contemporaries, the greatest value of a work of art lay in its suggestiveness, in its ability to arouse a suitable train of associations in the mind of the reader and to impart to him some fundamental truth. This process would be obviously be most fruitful when author and reader were well acquainted with the material used to express the theme, and the theme would most likely be true if it were based upon direct observation and knowledge.<sup>15</sup>

Ringe は、作品のテーマを表現するために用いられる材料が作品を描く作家とそれを読む読者に共通する知識に依存していれば、読者の心の中に豊かな連想を生み、それを通して真理を伝えられるということを論じた。

聖書に描かれたイエス・キリストの物語は、当時のアメリカ人であれば、誰

れもが知っている物語である。つまり、作家クーパーと読者が共有している物語である。そのうえ、クーパーが作品を書いた時代は、第二回目の「大覚醒」運動が盛んな時代とも重なっていた。すなわち、キリスト教信仰が問いなおされていた時代であった。Solberg がアメリカ各地に広がった第二回目の「大覚醒」運動の諸相を *A History of American Thought and Culture* の中で詳しく論じている。<sup>16</sup> このような風潮の中にあって、当時の読者は、聖書に描かれたイエス・キリストの物語を十分知っていたと言えよう。従って、クーパーは、Uncas の死とイエス・キリストの十字架の死を結びつけて書く必要がなかった。書かずとも、彼は、イエス・キリストの十字架の死の連想を生むことができたのである。と言うのは、クーパーは、Uncas の死の場面に到るまで、ふんだんに Uncas とイエス・キリストの類似性を描いてきたからである。

聖書に描かれたイエス・キリストの十字架の死は、救いをもたらしたと言われる。とすると、クーパーの描いた Uncas の死もその関連性を持つことになる。クーパーは、最終章第33章で Uncas の死がもたらした結果を描いている。Uncas の死が契機となって、ヒューロン族と敵対したディアウエア族が勝利を得た。そればかりか、Uncas と行動を共にした白人たちも Munro の娘 Cora を除いて、すべて助かった。ディアウエア族も白人たちも Magua の支配する闇の中に沈むことはなかった。彼等は、Uncas の死によって救いを得たのである。クーパーは、Uncas の死がもたらした救いが、広がりをもつことも述べている。フランス軍の代表が Uncas の葬儀に列席し、ウイリアム・ヘンリー砦のイギリス軍司官だった Munro が娘 Cora を失ったことに同情を寄せて、Munro に手をさしのべる。Uncas の死は、英・仏両軍の和解をとりなしたのだ。こうして、クーパーは、救いが世界に広がったのだと言うのだ。

クーパーは、物語の最後で Uncas の復活にさえ言及している。他の登場人物たちが、すべて家路についた時、ただ一人 Natty はインディアンたちと残り Uncas の埋葬に立ちあう。そして、愛する一人息子 Uncas を失った父 Chingachgook の悲しみに共感して Natty は言うのである。

He[Uncas] was your son, and a red-skin by nature; and it may be, that your blood was nearer; — but if ever I forget the lad ... may He who made us all ... forget me. The boy has left us for a time, but, Sagamore, you are not alone!(349)

Uncas は、一時的に去っただけなのだ。いずれ戻ってくるのだという含みが、

Natty の言葉に込められていると解釈するべきであろう。クーパーは、物語の後半で Uncas のメシヤ性を聖書に描かれたイエス・キリストの逮捕・裁判・死の場面と結びつけて描いてきた。特に、ヨハネ福音書のナタナエルを髣髴する Natty が、第3章始めで Uncas の出現を待ち、最終章で復活について述べているのだ。従って、Uncas の生と死は、ヨハネ福音書のナタナエルの視点が重視され、その枠組の中でとらえられていたと言えよう。

*The Last of the Mohicans* は、第1章から最終章第33章までキリスト教の救済史の線がその中を貫ぬいていたと言える。救済史は、旧約聖書を通して流れ、イエス・キリストによって成就されると言われる。新約聖書は、その初めから終りまで旧約聖書によって指示され、預言された救い主イエス・キリストについて書いたものと言われる。クーパーは、*The Last of the Mohicans* の作品構成に救済史を巧みに用いているのだ。第1章から第3章までは、天地創造、悪の存在そして旧約聖書の預言者の登場の部分に相当する。第3章以降最終章までは、新約聖書のヨハネ福音書の視点が用いられている。この視点の中で、クーパーは、メシヤ像としての Uncas を描いた。

クーパーの描いたメシヤ像は、二つの面を持っていた。一つは、自然とのかかわりの中でメシヤ像が描かれていたことである。もう一つは、聖書とのかかわりで描かれていたことである。すなわち、クーパーの描いたメシヤ像は、聖書の啓示と自然を通して与えられる啓示を結びつけようとしたところに結実したと言えよう。

なぜ、クーパーは、このようなメシヤ像を描いたのであろうか。それは、クーパーが救いを求めていたにもかかわらず、既成の生命力を失ったキリスト教で救いを得ることができなかったからである。クーパーのメシヤ像は、形骸化したキリスト教に対する批判なのである。

## 1. Henry Nash Smith *Virgin Land : The American West as Symbol and Myth*

(Cambridge : Harvard University Press, 1975)

彼の本は、1950年に初版が出ている。

Westward movement との関連でクーパーを論じたものはいくつかは、次のような研究書である。

Warren S. Walker *James Fenimore Cooper : An Introduction and*

*Interpretation*

(New York : Holt, Rinehard and Winston, Inc., 1962)

Edwin Fussell *Frontier : American Literature and the American West*

(Princeton : Princeton University Press, 1965)

2. Howard Mumford Jones "Prose and Pictures : James Fenimore Cooper" in *History and the Contemporary : Essays in Nineteenth-Century Literature*

彼の論文は、1951年のクーパー百年祭で発表された。

Coopere と画家たち、あるいは、美学との関係を重視した研究をいくつかあげておく。

James T. Callow *Kindred Spirits : Knickerbocker Writers and American Artists, 1807-1855*(Chapel Hill : The University of North Carolina Press, 1967)

Donald A. Ringe *James Fenimore Cooper* (New Haven : College and University Press, 1962)

*The Pictorial Mode : Space and Time in the Art of Bryant, Irving and Cooper* (Lexington : The University Press of Kentucky, 1971)

Blake Nevius *Cooper's Landscapes : An Essay on the Picturesque Vision*

(Berkeley : University of California Press, 1976)

H. Daniel Peck *A World by Itself : The Pastoral Moment in Cooper's Fiction*

(New Haven : Yale University Press, 1977)

3. James Fenimore Cooper *The Last of the Mohicans; A Narrative of 1775*

(Albany : State University of New York Press, 1983)

本論中の作品からの引用は、すべてこの版に拠る。

なお、( ) 中の数字は、そのページを示す。

4. Howard Mumford Jones "Prose and Picture : James Fenimore Cooper" in

- History and The Contemporary : Essays in Nineteenth-Century Literature* (Madison : The University of Wisconsin Press, 1964) 72
5. Donald A. Ringe *The Pictorial Mode : Space and Time in the Arts of Bryant, Irving and Cooper* (Lexington: The University of Kentucky, 1971) 44  
同じようなことは、  
James T. Callow *The Kindred Spirits : Knickerbocker Writers and American Artists, 1807-1855* (Chapell Hill : The University of North Carolina Press, 1976) 119-120  
でも論じられている。
6. Thomas Philbrick "The Last of the Mohicans and the Sounds of Discord" *American Literature*, 43(1971)31
7. James Franklin Beard "Afterword," *The Last of the Mohicans*(New York : New American Library, 1962)424
8. Warren S. Walker *James Fenimore Cooper: An Introduction and Interpretation*(New York: Holt, Rinehard and Winston, Inc., 1962)54  
Edwin Fussell *Frontier: American Literature and the American West* (Princeton : Princeton University Press, 1965) 40  
批評家のほとんどは、David と Uncas の関係については、全く論じていない。
9. John J. McAleer "Biblical Analogy in the Leatherstocking Tales" *Nineteen the Century Fiction*, 17 (1962) 223-225
10. 日本聖書協会 新共同訳聖書 (東京 : 1987) サムエル記上16章12節
11. 新共同訳聖書 サムエル記上 16章23節
12. 新共同訳聖書 ヨハネによる福音書 1章47節-48節
13. Roy Harvey Pearce *The Savages of America*(Baltimore : The Johns Hopkins Press, 1965)207  
Warren S. Walker *James Fenimore Cooper: An Introduction and Inerpretation*(New York : Holt, Rinehard and



Winston, Inc., 1962)37

先にあげた McAleer は、Natty と Moses については述べているが、Natty とヨハネ福音書のナタナエルの関係については、全く論じていない。

14. Donald Darnell      “Uncas as Hero : The Ubi Sunt Formula in *The Last of the Mohicans*” *American Literature*, 37 (1965) 265
15. Donald A. Ringe      *James Fenimore Cooper*(New Haven: College and University Press, 1962)26-27
16. Winston U. Solberg    *A History of American Thought and Culture* (Tokyo : Kinseido, Ltd., 1983)37-59